

その他

1.

『初めての点訳第3版』には、連続の「メ」の点は、訂正のしるしとありますが、他にどんな意味がありますか

【A】

「メ」の字は、6点すべてを書き、分かりやすいため、いろいろな場面で使用されています。

① 「初めての点訳」にあるように、メの字を二マス以上連続すると訂正の印になります。

② 「てびき」p110にあるように、囲みの記号類の形を例示する場合に、開き記号と閉じ記号の間に二マス程度入れる

③ 点字で記号の形を説明するとき、③④⑤⑥の点の組み合わせでできている記号は、記号の高さが分かりにくいので、記号の前や後ろにメの字を入れる

④ ページ行に原本ページを入れる場合に、メの字で囲む場合もあるなどです。そのほか、式の計算などの数字の伏せ字の代わりに使用したりします。

①～③は特に凡例などで断る必要はありませんが、それ以外は点訳書凡例などで断って使用するようにします。

2.

原本で（参照110ページ）などとある時、点訳では点訳書のページに書き換えてよいのでしょうか？それとも凡例や点訳挿入符などで断った方がいいのでしょうか。

【A】

特別に原本のページを示す必要がある場合を除いて、参照ページの記載は点訳ページに置き換えるのが一般的ですので、とくに説明を補う必要はありませんが、巻数を下がり数字で表したり、巻数とページ数をハイフンでつないで書いたりする場合は、その書き方を点訳書凡例で断ります。同じ巻の中のページを指す場合はページ数だけを書き、別の巻の場合は「ダイ3カン 50ページ」のように書いてもよいでしょう。

資料の性質によって、原本ページも知らせる必要がある場合は、記載する順序や囲み記号によって原本ページと点訳ページが区別できるようにして、そのことを点訳書凡例で説明します。

3.

原本で「前ページ」「右ページ」「p123」とある場合に、点訳ページに書き換えてよいでしょうか。またp123が同巻にない場合の書き表し方も教えて下さい。

【A】

原本に記載された「前ページ」が点訳書で前ページでない場合は、点訳書のページ数に置き換えるのがよいと思います。「右ページ」も、点訳書で前ページあるいは次ページであればそのように置き換え、離れる場合はページ数を、指している箇所が別の巻になる場合は巻数とページ数を記載します。

このほか原本で「下の表」とあるものが点訳書で次ページになったり、「次ページ」とあるものが同じページになったりする場合なども、読者が探すのに戸惑わないように適切な表現に置き換え、データ完成時には、ずれを生じてこれらの文言が合わなくなっていないかの確認も忘れずに行います。